

長野大学心理学研究室における子どもの相談活動（第2報）

Child Guidance Clinic in Psychological Laboratory of Nagano University (2)

大 藪 泰

Yasushi Ohyabu

1 活動の概要

1981年10月に長野大学心理学研究室で乳幼児を対象にした発達相談が開始されてから、2年6カ月が経過した(1984年3月現在)。この間の子どもの相談人数は、1981年度：5名、82年度：14名、83年度：19名であり、相談延べ回数は、81年度：26回、82年度：83回、83年度：114回であった。相談時間は、当初、毎週金曜日の午後と土曜日の午前であったが、83年度からは土曜日の午後にも相談が行われてきている。

相談活動の中心は、子どもの発達診断、遊戯面接、そして親との面接相談である。遊戯面接は主として学生が担当し、また子どもの行動観察も学生によって記録され、ケースカンファレンスの資料として利用されている。

従って、上田市やその周辺地域に居住し、発達や心理的な問題をもつ乳幼児を中心とした子どもたちとその家族を対象にして、心理相談の場を提供すること、また子どもを対象にした心理臨床活動の場に参加することにより、遊戯面接、母親面接、行動観察、発達診断などを学生が体験的に学習し、研究できる場を提供することという当初の活動目的を相当程度に果たしてきているといつてよいであろう。

2 ケースの状況

1) 来室児数・性別・年齢

年度別の新規来室児数、性別、年齢は、表1の通りである。

新規来室児数は、81年度：5名、82年度：9名、83年度：12名の計26名で、増加する傾向が認められる。

性別は、各年度とも男児が圧倒的に多く、3年

間の合計では、男児：21名、女児：5名であった。

年齢は、本相談室の当初の目的からして、1歳児から5歳児までの就学前児がほとんどである。

2) 主 訴

表2に示したように主訴は精神発達遅滞が最も多く、年齢は1歳児から5歳児にまでわたっている。自閉的傾向をもつ子どもも5名と比較的多く、最年少児は1歳6カ月であった(1歳6カ月健診で発見されて、本相談室に紹介されたケース)。行動・性格上の問題としては、遺糞、攻撃行動、多

表1 新規来室児数、性別、年齢

初診時の 年 齢	1981		1982		1983		計
	男	女	男	女	男	女	
1～2歳	0	0	2	0	1	1	4
2～3歳	0	0	3	1	1	0	5
3～4歳	1	0	0	0	3	1	5
4～5歳	1	0	1	0	1	0	3
5～6歳	2	0	1	0	2	1	6
6～7歳	0	1	0	0	1	0	2
7～8歳	0	0	1	0	0	0	1
計	4	1	8	1	9	3	26

表2 主 訴

	1981	1982	1983	計
精神発達遅滞	0	5	4	9
自閉的傾向	1	3	1	5
言語発達遅滞	1	0	2	3
行動・性格上の問題	2	0	4	6
神経性習癖	0	1	0	1
その他	1	0	1	2
計	5	9	12	26

動、新奇な場面に対する強度の不安がみられた。神経性習癖は7歳児のチックであり、母親にも強迫行動の訴えが認められたケースであるが、初回面接後に不來所となり相談は中断された。その他の2名は女児で、いずれも母親との分離不安を主訴として來所したケースである。言語発達遅滞の3名はいずれも男児であった。

3) 居住地・來室経路

來室児の居住地は、表3に示したとうり、上田市内のものが大多数を占めるが、82年度には更埴市から、83年度には東部町、丸子町、白田町からも來室するようになってきている。

來室経路は、表4にあるように1歳6カ月健診からのケースが8名と最も多く、次いで保育園、上田市保健相談室からの紹介のことが多い。保健婦からの紹介は83年度に3ケースある。母親が直接、電話してきたケースは、82年度と83年度に各1ケースであった。再来は遺棄のケースで、就学前に好転終結としたが、1年生の夏休み終了後に

表3 居住地

	1981	1982	1983	計
上田市	5	8	8	21
更埴市	0	1	0	1
東部町	0	0	2	2
丸子町	0	0	1	1
白田町	0	0	1	1
計	5	9	12	26

表4 來室経路

	1981	1982	1983	計
上田市保健相談室	3	1	1	5
1歳6カ月健診	0	6	2	8
保育園	2	1	3	6
幼稚園	0	0	1	1
保健婦	0	0	3	3
母親	0	1	1	2
再来	0	0	1	1
計	5	9	12	26

表5 処理と回数

	1981		1982		1983		計
	プレイ	面接	プレイ	面接	プレイ	面接	
子ども	26		83		114		223
母親		26		76		103	205
父親						1	1
両親				7		10	17
保健婦				5		6	11
保母		2		1		7	10
計	26	28	83	89	114	127	467

再発したため、母親が再度の相談を求めてきたケースである。

4) 相談回数

相談には子どもと母親とが來室する場合がほとんどであるが、表5にあるように父親と來室する場合、両親がそろって來室する場合もあり、また保健婦や保母と一緒に來ることもある。

子どもに対しては遊戯面接を行っているが、その回数は、81年度：26回、82年度：83回、83年度：114回であった。子ども以外の人たちに対しては面接を行っているが、その回数は、81年度：28回、82年度：89回、83年度：127回であった。

5) 相談経過

83年3月現在の相談経過を表6に示した。継続中のものが10ケース、好転のため終結が8ケース、中断が5ケース、他機関受診が3ケースであった。

表6 相談経過

	1981	1982	1983	計
継続	1	2	7	10
終結	2	3	3	8
中断	1	3	1	5
他機関	1	1	1	3
計	5	9	12	26

3 おわりに

長野大学心理学研究室における子どもの相談活動は、週2日の地味な仕事ながら、この2年半の間に上田の地域に静かに浸透してきているように思われる。奇しくも、相談機関相互の連携の必要性が認識されはじめ、地域の相談システム作りが

上田市において議論されはじめようとしている。この相談室が、こうした相談機関の一翼を担うことができれば幸いである。

〈謝辞〉

相談室の活動をいつもながら暖かく見守ってくださる本学の諸先生や職員の方々に深謝いたします。